

彷徨日和

白縫いさや

啓示

私の拍手を合図にショーは始まる。

草原の真ん中に作られた小さな劇場はとても質素。少し盛り上がった土の上に板を置いただけ。その上で、彼はぺこりとありったけの心を込めてお辞儀をする。すると、つつつ、って空から真っ白な細い糸が降りてきて、彼の頭と両手足にびたりと吸い付いた。糸が吸い付く瞬間が私は大好き。私もいつかあんな風に、と思う。

彼がくるくると素敵なダンスを踊ると、彼の手の振りやステップが白い軌跡を描く。クレヨンで描いたような、子供っぽい白色だ。その軌跡が幾重にも渦巻いて彼を包んで、彼はやがて大きな繭になる。

すると雲より高いところから垂れていた糸が一本に縊られて、繭は少しずつ解かれていく。そして全部解かれると、彼は無数の蝶になって四方八方に飛んでいく。黄色くて小さな、可愛らしい蝶。

わああ、わああ。

いつの間にか劇場の周りにはたくさんの観客がいて、それぞれが歓声を上げる。無数の蝶は歓声や指笛の音に乗って、見えなくなるくらい遠くまで飛んでいく。

そして、蝶の軌跡は全部淡いブルーだけどその中に一つだけ紅いのがあるから、私はそれを追ってどこまでも歩いていく。

四季の折々に極彩色の花を咲き散らす樹の下で少女は生まれた。いつもそんな夢を見る。薄茶色の毛布をどけて立ち上がると、足元には古地図があった。図書館の背の高い本棚と、それより遥かに高い天井、天窓、真っ黒な羽根を撒き散らし横切る黒い鳥。青は鳥に啄ばまれた。灰色の空に白い雲が溶け込んでいる。彼方のステンドグラスのキリストは磔にされていた。十字架の足元の罅に咲くのは紅い薔薇。

古地図に描かれたコンパスは西を示していたので、少女は古地図の上を西へ歩く。少女がツェッペリンの飛行船を跨いだところで、

「ビッグベンは鳴らないよ」

「鳴らないわね」

本棚の上で寝そべる少年は少女を見下ろした。

「海を渡るの？」

「紙の海なら絶対に溺れないもの」

本棚の一段から黒い鳥が現れて、向かいの本棚へゆっくりと飛んでいく。とても醜い鳥だった。禍々しい声で鳴く鳥は紛れもなく少女の鳥だ。少年は鳥の背に飛び乗ると、首を絞めた。鳥は奇声を上げながら死ぬ。古地図の上に鳥と少年が落ちた。遅れて、黒い羽根。少女の視界一面を覆う。羽根が全て落ちると紅薔薇に穴が空いていた。先の見えない穴に向かって古地図は続いている。西へ。

真っ白な少年の手が、穴の奥から少女を呼んでいる。

躍る

三日月形に照らされた円形のダンスホールで、子供たちは社交ダンスを踊る。歪んだミラーホールの怪しい光とへたっぴなワルツを伴奏にして。

子供たちはくるくる回る。ホールの明るい部分では互いの顔が見えるので互いに目配せしあうのだが、一度闇に足を踏み入れると、視覚も記憶も失ってしまう。次に三日月形に躍り出たときには全く別の子と抱き合っていることも珍しくない。

長い夜を踊り明かし、朝を迎える頃には子供の数がかくんと減っていた。闇に取り残されたのだ。

お手洗いのパパを待つうちにアイスが溶けて、べしゃって地面に落ちた。パパは泣きじゃくるあたしに「新しいの買って帰ろう」と言って頭を撫でた。あたしのパパは世界一だ。

遊園地の帰り道、あたしとパパは手をつないで他愛のない話をする。また行こうねって。そう言うとパパは笑うけど、傍目には悲しそうに見える。でもそんなことないって知ってる。前に長く伸びた影や夕暮れの永遠みたいな時間がパパをそんな風に見せるのだ。あたしとパパをつなぐ手が、歩くリズムでぶらぶらと揺れる、そんな気怠さがいい。

パパの無口さは男らしくて素敵だ。歩きながらあたしが話すのは、たとえば友達が面白いって言ってたアトラクションがそれほどでもなかったことや、パレードが子供っぽくて冷めたこと（でも楽しかった、って言う。本当のことだから）。パパはあたしの話に相槌を打ち微笑んでくれる。夕陽はいつまでも沈まなくて、路地も果てしなく続いてて、でも永遠じゃないからあたしは時間を惜しんで夢中で話をする。

だからあたしは影が増えたことに気付かなかった。パパを挟んだ反対側に、あたしより大きくてパパより小さい影が一つ。ショックだったのは、その影がパパと手をつないでいたこと。

パパを見上げると、パパは隣の誰かと話をしていて。パパの向こうにピンク色のフレアスカートの裾がちらつく。パパの薬指の銀の指輪が、夕陽に反射してきらきら光っていた。ねえパパ！

と声を上げて腕を引っ張ってもパパはこちらを振り向かない。それどころかパパは、信じられないくらい明るい声で笑ったり拗ねたような声を出したりと、あたしの嫌いな軟弱な男に成り下がってて、もう腹が煮え繰り返って、パパッ、と怒鳴る。するとパパは悲しそうな顔でこちらを見てあたしの手を振りほどく。そして女と、愛娘であるこのあたしを置いて歩いていってしまう。走ってもあたしはパパに追いつけない。やがてパパと女は地平線の彼方にすっと落ちてしまった。同時に日が暮れる。

取り残されたあたしは涙と鼻水で顔中べとべとになる。さっきパパが買ってくれたアイスはすっかり溶けていた。あたしの後ろには溶けたアイスが点々と続いていた。何がいけなかったのだろう？ たとえば、アイスさえ溶けなければパパは行ってしまわなかったかもしれない。そんな非論理的な考えがだんだんわたしの中で絶対になって、ああ、私は明日もこの馬鹿げた妄想を繰り返すのだろうなと絶望する。

連れてゆく

小さな腕に抱かれたぬいぐるみ達は姉妹達の影を見る。

どの影も歩調が合っていないので、みんなお家に着くまでまだ時間がかかりそうだね、と囁き合う。

景色だと思っていたものは、実は全て擬態した虫だった。

女が笛を吹いて魔法を解く。四方を囲んでいた硝子のビル群はたちまち白い蝶に解けて空に散り行き、道行く人も頭から蟻の群となり崩れ行く。女はなおも笛を吹き、魔法を解き続ける。一体どこまでが魔法なのだろう。あらゆる擬態が暴かれたにも関わらず、侵食は止まらない。すっかりまったいらになった地平の、半球状の空が天頂から解れていく。空のあの青はシジミ蝶の青だったのか、と感心する傍から覗いた穴には無数の星が瞬く。それが蛍であると気付くのに時間はいらなかったのだけれど。

地面も消え失せた。女は面を上げ、僕に選択を強いる。

「最後の魔法を、解きますか、解きませんか」

はい、と頷く僕に迷いはない。

盲目少女

盲目少女は七歳のときに光を失った。菌が眼球をすっかり虫食いにしてしまったのだ。痛みはなかった。

涙と思っていたものは融けたガラス体だった。ねえおかあさん、と母親の方を向き直ったとき母親はすぐには助けてくれなかった。理由は母親の息を呑む音で判ってしまった。哀しかった。そのときにはもう何も視えなかったけれど、窪んだ目の穴に残った水溜りみたいなガラス体に夕陽が反射して、きらきらと、ちくちくと、とおい昔に両親に連れられて行った岩場の浅瀬をぼんやりと思い出すのだった。

岩場の浅瀬。バケツいっぱいにあさりとざりがにと綺麗な石を拾った。波の音なんて少しもしなくて、びよびよびと風が吹くばかりで、見上げた父の顔は夕陽の陰影に隠れていたけれど微笑んでいたのは確かだった。

——、おいで！

母親に呼ばれて盲目少女は浅瀬に足を入れ脛まで濡らす。水はひんやりと冷たかったがすぐに肌に馴染んだ。ビーチサンダルは水の抵抗で重く、磯の香りは一層強くなる。ようやく辿り着き母が見せてくれたのは水平線ぎりぎりを横切るタンカー。いつまでも横切り続けていた——。

鍋が泡を吹く。この日はあさりの味噌汁だった。ねえおかあさん。おかあさん。いつまでも、ずっと、盲目少女は母親を呼んでいたような気がする。

黄昏の迷子

けん、けん、ぱ。と跳ねる子どもたちを見ている。公園の時計は六時を示し、空は茜色に染まりつつあった。のどかなチャイム、子どもたちの帰宅を促す放送、ドヴォルザーク。子どもたちは砂地に描いた円を目印に、けん、けん、ぱ、を繰り返す。長く引き伸ばされた影が色濃い。

高学年の子は低学年の子を助ける。低学年の子は高学年の子を慕い、中学年の子は拗ねている。ブランコを漕ぐ。シーソーを揺らす。ジャングルジムに登る。けん、けん、ぱ、を見下ろす、夕焼けを眺める、見とれる。三羽のからすが夕陽を横切る。みんな、笑っている。静かな夕暮れ、夕飯の香り、銭湯の煙突から立ち昇る湯気。

けん、けん、ぱ。と子どもたちは跳ねる。右足、右足、両足。その度に子どもたちは帰ってくる。それからぐるっと回ってもう一度。低学年の子が列に割り込もうとするのを高学年の子が叱り、中学年の子はジャングルジムのてっぺんでぼんやりとしている。けん、けん、ぱ。子どもたちの声。けん、けん、ぱ。けん、けん、ぱ。けん、けん、ぱ。左足からは、決して、始めてはいけなかったのだ。

——ごはんだよおー。

子どもたちは一斉に帰ってゆく。けれど私だけは帰れない。

帰路へ着く人々の流れに逆らい歩いている。彼らは顔中に疲労を滲ませているのにどこか幸せそうで、私と肩がぶつかっても私の方がよろめくばかりだ。彼らは黙々と家族の待つ家を目指す。それは幼い子が笑顔で出迎えてくれる家だろうか、新妻がかいがいしく世話を焼いてくれる家だろうか、年老いた父母が肩を並べてテレビを眺めている背中が見える家かもしれないし、もしかしたら一人暮らしで扉を開けても暗がりがあるだけの家かもしれない。それなら近親感が湧く、少しだけ。彼らは一様にぼんやりとした眼差しで前を向いていたり、視線を足もとに落としていたり、携帯電話を眺めたりしている。しかし誰も空を見ようとしない。日の長い夏の夜の空には薄らぼんやりと紺色の濃淡が広がっていて、その裾野を街灯や建物の灯りが仄かに黄色く染め上げている。中空にぽつんと金星が瞬く。私も帰ろう、家に帰ろう。と、誰かと肩がぶつかった。よろめく。それでも私は歩かなければならないので、足を摺り前へ前へと進む。また誰かとぶつかる。転ぶ。それでも私は。べちゃり、べちゃり、と顎と腰で地を這い進む。腕などとうに失くした。人の足の隙間から空を睨み上げる。遠い。

I can fly!

空のずっと高いところまで昇って林檎を手放すと、林檎が落ちずにふわりと漂うようになる境目がある。科学者たちは空に立掛けた梯子を上り、その境目を探している。林檎を盛った大きな藤の籠を背負い、偉大な一步を踏み出すのだ。やがて十分な高さになると、彼らは林檎を落とし始める。一步上って林檎を落とす。また上って林檎を落とす。梯子の足元には砕けた林檎の山が築かれ、芳しい香りを放っている。やがて籠の林檎を全て落としてしまうと、最後に彼らは自分の体を投げ出す。自分の仮説と運を信じて！ こうして彼らは空を飛ぶ術を探しているのだ。

タイムカプセル

タイムカプセルを籠に盛り、ブン、と空に向かって力いっぱい投げつける。太陽と重なり合っ
て一瞬だけ蒸発した後にばらばらとタイムカプセルが落ちてくるが、中には落ちずに消えてしま
うものもある。それこそが本物のタイムカプセルだ。どの未来に落ちるか定かではないけれど。

*

こつん、と頭に何かが当たって地面に落ちた。真鍮で出来た野球のボールみたいなそれは一見
すると金属であるが持ってみると驚くほど軽い。どこから降ってきたのか見上げてみるが、空は
夏の色。と、遠くからセスナの唸り声。後でタイムカプセルと知るそれを右手に今はただぼうと
空を見ている。

魔法

興奮醒めあらぬタコ足宇宙人が通訳を伴って現れた。

「空飛ぶ鉄塊に光る硝子球、感動した。と申しております」

お礼に、と渡された装置を使って、以来ぼくは自在に虹を作れる。